
満天の星空の下で

三谷コウタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満天の星空の下で

【Nコード】

N45870

【作者名】

三谷コウタ

【あらすじ】

高校2年生の春谷旬太には朋美という好きな女の子がいた。彼女とは物心ついたときから仲良しで、いつも一緒にいた。しかし、彼女は私立の中学に行ってしまう、とうとう離ればなれに。そこで落ち込んでいる旬太を支えてくれたのは親友である平川康介だった。そして、旬太たちが高校に進むと何とそこには朋美の姿が！ 旬太は再びあえた事に喜ぶが、親友である康介まで朋美を好きになってしまった。親友である旬太と康介の心は互いにもつれ合ってしまうが……

第1話　― 星空 ―（前書き）

初めて小説に挑戦しました。つまらないと思いますが、それでも感想等頂けるとうれしいです。もし読んでいただけたなら、ぜひ感想をお聞かせください！　お願いします。

第1話 ― 星空 ―

夜空に輝く星がとても奇麗だ。一つ一つの星は小さいが、小さな光を灯し合って幻想的な世界を造りだしている。その中には青い星や、赤い星などもあり、それぞれが好きのように輝いていた。踊るように輝く星々は、集まっているものもあれば、ちりぢりな物もあった。本当に自由。気の赴くままに、輝いているようだ。

でも、他の星まで光で飲み込んでしまうようなことはしない。もう少し前は、太陽が出ていた。太陽は空の全てを照らし、小さな星なんて見えなくしてしまう。

でも、今はもう太陽は出ていない。太陽は静かに沈んでくれた。

「奇麗だな……」

「うん ……」

あいつと二人で、満点の星空を見上げる。

俺は、こいつと二人で居られるのがとても幸せだ。こないいいパトナー、一生かけて探してももう二度と見つけれないだろう。

夜空の下で、俺は泣いてしまった。

「なに……ないてんだよ……バカ……」

「だって……」

いつまでも泣いていた。いろんな感情が混ざって、うまく言葉にならない。

やっと終わったのだ。俺は、長年悩み続けた。悩んで、悩んで……ずっと落ち込んでる時期もあった。くよくよし続けた時期もあった。だが今は、こうしてここに居られる。いまここで、こうして居られるのなら、いままで悩んできたことも、悪くはなかったと思う。

俺たちは夜空を眺め続けた。本当に満点の夜空で、吸い込まれてしまいそうだった。

また、明日から退屈な日常が戻ってくる事など、頭の中にはかけ

らもなかった。

この楽しい時間はいつまでも続く。そんな気がした。

この素晴らしい時間を抱きしめていたい。こんな綺麗な空の下で

……これからも……ずっと……

第1話 ― 星空 ― (後書き)

最後まで読んでいただき本当にありがとうございました。初めての作品だったので勝手がわからず、たじたじの作成でしたがなんとか書ききれました。ご感想等いただけたら幸いです。ありがとうございました。

第2話　―朋美―

右手で持っているペンをクルリとまわす。

「いいか？　この場合、 X 軸について線対称と言う事はだな……」

黒板の上に掛けられている時計が、退屈な時間を一秒一秒、丁寧に刻んでいる。

数学教師である小村は、関数の問題について無駄に詳しく説明していた。最近、妙に授業に熱が入っている。もうすぐ、テストが近いのだ。自分が担当するクラスにいい点を探らせたいのだろう。

そんな、下らない教師の熱意のせいで、ただでさえ退屈な時間に、眠る事ができないという何とも不愉快な状況に陥っていた。だが、俺はそんなことではめげない。もはや、鉛のように重くなったまぶたをしつかり見開き、教科書と向かい合う。教科書に書いてある問題に、一文字ずつ目を通し、右のグラフを見る！

そして、そう！　 X 軸と Y 軸が作り出す二次元空間の中で、数本の線が直進したり…… U ターンしているのを見ていると……だんだん視界が狭くなってきて……

「春谷！　おい、寝てる場合じゃないだろ！　今は授業について来れてもな、油断してるとすぐに成績は落ちるんだからな！」

「あ、は、はい！　大丈夫です！　大丈夫です。」

また、やってしまった……

わかってても、ついつい寝てしまうのだ……

「全く……そうやって授業中寝てるような奴が、わからなくなったからと言って、塾に駆け込むんだ??」

もう小村に憎まれ口を叩かれるのは、慣れていた。小村はまだグチグチ言っているが、この俺をなめるな。人間つてのはな、環境適応能力つてもんがあるんだよ！　この場合、環境適応能力という言葉が合っているのかはわからないが、とにかく俺は慣れているのだ。

こうして、いつも通り退屈な時間も過ぎていく。

そして、もう一つ、いつも通り……いつも通り、教室内に特別なものがある。

「くすつ……」

俺が怒られた事に教室のみんなが笑っていたが、俺には一人しか見えていない。俺の席から、二席前にいる娘。

背中までのびる茶色がかったふわふわでさらさらの髪。その一部を肩のあたりで束にしてリボンで結んでいる。見ているだけでいい香りがしてきそう。目は少しだけたれ目。とろんとしている。

にしはらともみ
西原朋美

それが、彼女の名前だ。

彼女とは別に、特別な関係にいる訳ではない。彼女にとって俺は、ただの幼なじみだ。特別、意識してはいないだろう。

だが俺は、違う。

俺にとっては、違う。

朋美は俺にとっては、この上なく特別なのだ。

朋美と出会ったのがいつだったかは、覚えていない。

朋美の家は近所で、小さい頃はよく遊んだ。親同士の近所付き合いが合ったから、物心ついた時には俺は朋美の事は知っていたし、仲も良かったのだ。

そして、俺も朋美も兄弟がいて、小学校低学年くらいまでは、俺の妹と朋美の弟と四人で遊んだりもした。小学校の裏にある竹林に入って、忍者ごっこをしたり、鬼ごっこをしたり……

そうこうしているうちに、俺たちは高学年にあがっていった。

5年生になっても俺たちは同じクラスだったが、さすがに、高学年にもなると女の子と遊ぶのは気が引けたし、話す機会も減っていた。

でも、俺はその時から朋美の事ばかり気になるようになっていた。授業中もちよつと集中力がきれると、彼女の方を見てしまった。休み時間でも近くで彼女が話していると、そちらに耳が傾いた。夜寝る時も、彼女の顔が浮かんで落ちついて眠れなかった。

小学5年生の俺には、この気持ちが何なのかはよくわからなかったけど、彼女がいるだけで、彼女に会えるだけで、学校が楽しかった。そんな楽しい時間が終る事など考えもしなかった。

楽しい！

明日も、朋美に会える！

それだけで、十分だ！

俺は、だんだん膨らむこの気持ちが、恋なんじゃないかと気づき始めていた。そうだ、きっと恋なんだ。

でもそれに気づいたのと同時に、恋は終わりを告げる。

朋美は、中学受験をするというのだ。

それを知ったのが小学6年生に上がってすぐだ。

彼女が受ける学校はそれほど、偏差値の高い学校ではなかったが、英語の教育が秀でており有名だった。中学のうちから海外研修があるほどなんだそうだ。彼女は、将来、留学でもする気なんだろうか？ そんな事も考えた。

俺は、本気で悩んだ。俺だって成績はいい方だ。いまから塾に入れば、その学校に入れるんじゃないか？

しかし、無理だった。親が許してくれなかった。

「そんな学校、入ってどうするの？ 将来、海外で仕事したいの？」母親に質問されたが答えられなかった。「好きな子が行くから、俺も行く」なんて、とても言えない。適当に将来を語ってもよかったが、親を騙してまで突き進む決心も、自信もなかった。

結局俺は、朋美を諦めた。

所詮、俺の一方的な想いだ……そんな風に自分に言い訳をして、告白もしなかった。

中学も違うのに、うまくいくわけがない……そう勝手に決めつけ

て。

二月になり、朋美は中学の合格を決めた。そうして俺たちは、中学生になった。

そして、俺は中学に上がるとかなり後悔した。中学2年生にもなると、周りには違う学校のやつと付き合う奴もいっぱいいた。

やっぱり、告白しとけば良かった……

後の祭りだった。

ここ最近彼女と顔を合わせる事は無かったし、小学校の頃は携帯なんてもってなかったので、メールアドレスも知らなかった。

俺は、ずっと落ち込んでいた。いつまでも、いつまでも。中学2年生が終わっても、永遠と朋美を想い続けた。自分でも情けないと思った。でも、想いを断ち切る事は、できなかった。

中学3年生で一人の親友と出会わなければ、ずっとくよくよしてただろう。そいつは俺を支えてくれた。

そいつは、偶然同じクラスになった。すぐに、仲良くなった、いろんな話をした。そいつは俺の話をちゃんと聞いてくれた。俺に好きな人がいる事。結局告白出来ずに、後悔している事。ずっと、想い続けている事。全部吐き出して、俺は少し、前を向けるようになった。

そのまま、俺は、そいつと同じ高校に上がった。それはべつに、そいつが、その高校にいくから俺も行く事にしたのではない。学力がだいたい同じだったから、そのまま同じ道に進んだ。

そして。

俺は高校の入学式で、信じられない体験をする。

春休みの余韻が抜けきらないまま、それと同時に、高校への希望と不安を抱えて。集まってくる集団。高校の教室が開くまで、新入生は全員、昇降口の前で待たされていた。

これから、新しい生活が始まる。そんなことを、思っていただろう。未練は合ったものの、だいぶ傷が癒えていた俺はその集団の中に、一人の女の子を発見する。

「朋美……」

思わず声に出してしまった。しかし、その声は人ごみにまぎれてしまう。

おそらく俺は、30秒ほど口をあけて、間抜けに立っていただろう。あまりの出来事に、状況がわからなかった。

真っ白な頭を必死に整理していると俺は、無意識に朋美に駆け寄っていた。高鳴る気持ちを押さえて走り寄った。また、あの楽しかった頃の感覚がもどってくる。

なんでここにいるんだ？ 留学はしなかったのか？ 中高一貫校だっただろ？ 中学ではどんなだったんだ？ 高校から学校変える事にしたのか？ いままでずっと……ずっと……俺は！

そんな疑問や想いが目まぐるしく頭の中をとび交ったが、なんとか押さえて彼女に歩み寄った。

しかし、そんな時、集団は一気に動いた。俺を邪魔するように。

まるで、押し寄せる波の様に。

昇降口が開いた。

朋美に追いつく事はもうできなかった。

「朋美……」もう一度つぶやく。

追いつく事は出来なかった。

でも、俺の心は喜びで破裂しそうだった。いろいろな疑問はまだ頭の中に巡っている。しかし、そんな疑問なんてどうでも良かった。また朋美といられる。朋美と同じ学校に通える。

俺の心は小学生の頃と同じだった。

そうして、おれの高校生活は始まった。

第3話　―帰り道―

キンコンカンコン……

授業の終わりを告げる幸せの鐘の音色が響く。

「えー。次の授業までに、72ページに書いてある事を予習しておくこと。いいな！　じゃあ、委員長

長。号令」

「キリーツ。キョツケー。レー」

委員長が慣つきたように号令をかけ、小村が教室から出て行くと、クラスは一気に放課後モードになる。今日は六時間なので、このあと軽いホームルームがあつて、それで終わりだ。担任が教室に来るまでの間、クラスはにぎやかになる。

「部活かー……だりーなー」

「なに言つてんだよ。今週末、練習試合だぞ？　おまえ大丈夫かよ」

「ねーねー？　このあと、あの店寄らない？」

「いいね！　いいこいこ！」

「これF組の田中に、渡しとけよ」

「了解。居なかったら、机に置いてくだけで良いだろ？」

そんな、放課後トークが聞こえてくる。朋美はというと……

……いない……トイレでも行つてしまったのだろうか？

ちよつとシヨンボリしていると、俺にも声がかかった。

「旬太^{しゅんた}。一緒に帰ろうぜ！」

声をかけてきたのは、平川^{ひらかわ}康介^{こうすけ}。さっき言つた中学からの、俺の唯一の親

友だ。

「ホームルームまだだろうがよ。せつかちだな。今日、部活は？」

「休み。この土日、両方練習試合だったからさ。月曜は休み」

「そっか。じゃあ、コンビニでも寄つてく？」

そこで教室の扉が開く。担任の豊崎先生が入ってきた。

「いいよ。じゃ、あとでな！」

康介は一見すると、スポーツをやっているようには見えない。サッカー部に属しており、夏休み明

けというのもあつてかすっかり日焼けしているが、それでもスポーツマン特有の気合いの入った感じ

というものが皆無だ。サッカーはそこそこにうまいらしいが、あいつを見ている感じだと、とりあえ

ずやっていると言った感じだ。容姿は決して悪くはない。しかし……バカだ……

豊崎先生は教卓について、明日の予定について説明しだした。特に変わったことはなく、いつも通りの火曜日課だそうだ。

「じゃあ、今日はコレで解散ね。委員長。号令かけてくれる？」

「キリーツ。キヨツケ。サヨーナラー。」

お決まりの号令に合わせてみんな「サヨーナラー」と復唱する。

そして、豊崎先生は教室をさっさと出て行く。その様子を、何人かの男子は目で追って、

「やっぱ、豊崎先生って美人だよなあ。スラッとした体に、スーツ、そして眼鏡！最強コンボだよなあ」

「ああ、そうだよなあ……憧れるわあ」

豊崎先生を見て鼻の下をのぼしてる男子を、汚らわしそうに女子達が見ている。

恒例の動作が一通り済むと、後はみんなバラバラだ。部活に行くもの。掃除をするもの。帰るもの。

俺は無意識に朋美を見る。なにやらとなりの女子と相談している。しばらく話した後、そのまま教室を出てしまった。今日は部活なんだろう。

朋美は、読書部とやりに所属している。なんだか珍しい部活だが、

活動は読んで面白かった本を他

の部員に紹介して、一人一人紹介したら、後は本を読んだり、お菓子を食べたりとかなり自由な部活

だそう。その気楽さが人気なのか部員は、なかなか多い。全学年合わせて20人くらい居る。文化

系の部活にしては、多いだろう。活動も週一回、月曜のみなので、とりあえずなにかの部活に入りた

い奴にも、手頃なんじゃないだろうか。

それはそうと、帰る約束があるので康介を探してみる。あいつも教室の入り口あたりで数人の男子と話している。サッカー部の奴らだろうか。

「あいつらも相談か……」

俺は部活には入ってないので、放課後にだれかに会って相談なり打ち合わせなりというものが全くない。

あいつらは忙しいね……

何となく窓際に寄りかかって空を見た。綺麗な秋空だ。薄い雲が帯みたいに手前から地平線に向か
つてのびている。

ふっ、と空しくなる。

「俺……小学校から変わってないじゃん……」

俺は高校に朋美と共に入る事となったが、中学のブランクが合つてか、未だにコミュニケーション

がとれない。1年のときは朋美と違うクラスだった。運命もそこまでお人好しではないのだろう。そ

んな風に黄昏れていたが、2年に上がってあっさり朋美と同じクラスになった。そのときは、入学式

の時以上に狂気した。これで、また、楽しい時間が過ごせる！そう思った。

でも、現実はやっぱりそうじゃない。

俺は小学校の頃から変わってなくても、朋美は変わっていた。

小学校の頃にはなかった魅力をたくさん持っていた。

もちろん俺は、いままで以上に朋美に惹かれた。でも、俺は魅力があるから惹かれているのだ。そ

の魅力を感じるのはもちろん俺だけじゃない。

簡単に言ってしまうえば、朋美はモテるのだ。

実際このクラスの何割かの男子は、朋美を好きでいるだろう。

ますます、小学校の時に告白するんだったと後悔する。せつかく、

同じ高校に入れたのに……皮肉

にも、同じ高校に入ったから、もつと後悔する。

そのとき、ツンツンと肩を軽く突かれる。ハッとして振り返ると、

「よっ！ お待たせ」

「ああ、康介か……」

「康介か、って何だよ？ もつと他の人に話しかけてほしかったか？」

「うう……ちよつとでも期待した俺が馬鹿でした」

「馬鹿で結構、結構！ 期待するのは大事な事だぜ？」

「何、格好つけてんだよ……早く行こうぜ」

康介がそんな馬鹿な台詞を言いながら馬鹿丸出しのポーズをとったので、話を続ける気にならなかった。

そのまま、さつさと昇降口に向かう。

俺と康介は本物の親友だ。康介に出会えた事は本当に感謝する。

相談は何でも出来るし、康介も俺

を頼ってくれる。普段は爽やかに見える康介も、俺の前では全然そんな感じはない。素で接してくれ

ているのだろう。という事は、こいつの爽やかは作られてるってことになるが……

だが、そんな康介にも打ち明けてない事がある。

実は朋美のことだ。

確かに朋美のことは相談した。康介は相談に乗ってくれた。だから、俺は康介と親友になれた。

しかし、康介はまだ知らないのだ。なぜ自分が高校に入ってから、康介に打ち明けなかったのかと聞かれると、はっきりとは分らない。

でも、俺は朋美のことは自分で決着をつけたいと持ってた。だから、まだ康介には打ち明けてなかった。

俺が、小学校の頃から想い続けているのは、西原朋美だということとを。

今、俺たちのクラスに居る、朋美なのだということを。

中学で康介に相談した時、俺は朋美の名前は出さなかった。伏せていた。名前までべらべらしゃべ

ってしまつと、なんだかもう過去のことみたいになっちゃう気がしたから。もちろん、康介も名前を

知りたがった。でも拒否した。そして、そのままここまで来てしまったのだ……

学校からコンビニへ向かう途中、康介とたわいのない話をした。

この前のサッカーの練習試合の時の事や、クラスの友達の話や、

豊崎先生の事や……

同じクラスの男子のことを話題にして、大爆笑したり。もうすぐ発売になるゲームの予約はしたか

どうかとか。あの漫画、まだ最新刊が出ないとか。そんなことを話してた。

そうこう話してるうちに、だんだん恋の話になっていった。まあ、いつもの流れだろ。

俺が茶化して、あいつだろ？あいつだろ？って、康介を問いつめていった。

だが、今日の康介は俺のおふざけに対するのりが悪い。本当に些

細で、周りから見ればいつも通り

かもしれない。でも、微妙に硬かった。冷たかった。

「なあ、旬太」

「な、なんだよ……」

康介が突然、真面目な声で呼びかけてきたので、少し驚いた。

「相談してもいいか？」

「うん……別にいいけど」

本格的に真面目モードだ。目が怖い。

俺が、OKサインを出しても康介は何も言っていない。

かなり間があった。

そんなに、深刻なそうなんだろうか。

そして、二人の間に、程よく沈黙が浸透した頃、

「……俺、好きな人がいるんだ！」

「へ……？」

あまりに唐突だったので、間抜けな声しか出なかった。

好きな人が居る？ そうなのか。へへ。

「つて！ マジかよっ！」

結構驚きだった。康介は、普段から飄々^{ひょうひょう}としており、恋愛には興味がないと思っ
っていた。

康介は珍しく恥ずかしそうにしている。意外と恋愛には弱いのかな、康介は。こんな康介を見るの

は新鮮で意外と面白いことではあった。つい馬鹿にしたくなるが康介は至って真面目なのでやめてお

いた。こっちもちよつと真面目に話してみよう。

「じゃあさ、告って見れば？」

康介は、きよんとしている。

ちよつといきなり過ぎたか。

「えっ！？ 告るつたって……てか、おまえ俺が誰のこと好きなのか知ってんのか！？」

「そういえば、知らなかったな。だれなんだ？」

「いや……でもちよつと自信ないし……あの娘のこと好きな奴、結構いるみたいだし……」

「そうなのか？ お前も意外と、アイドル性高い奴とか好きなんだ？」

「そういうわけじゃないけど……」

このとき、俺は他人ごとみたいに考えてた。

こいつのことだから、きつと告白してうまく行かなくても、すぐケロッと忘れて……

最初からうまく行かないと決めつけるのは可哀想だな。

でも、そんな風になるんだろうと思ってた。

康介が次の一言を放つまでは……

「俺が好きな……西原なんだ……」

「えっ……？」

俺は焦った。朋美のことを好きな奴が新たに発覚したから……もちろんそんな理由ではない！

康介が。俺の親友が。俺と同じ人を好きになっていた。

俺はしばらく黙ってしまった。何も言えなかった。

康介も同じ様に黙ってしまった。俺の考えてることがばれたのだろうか。康介はじつと俺の顔を見

ているが、俺は康介の顔を見れない。

「ああ……いや……いいんだぜ！ 何もしてくれなくて！ 俺もただお前には知つといてほしかっただけだからさ！」

康介が取り繕う様に言ったが、康介はきつと俺の頭の中を正しく理解出来ていないだろう。いや、出来る方がおかしい。

俺は康介に、俺が好きな幼なじみの名前を教えていない。康介は俺が好きな幼なじみは、中高一貫

校に通っていると思っっているだろう。その幼なじみが同じ高校に通

う西原朋美だなんて、誰が想像で
きるんだ！

「旬太……悪かったよ……お前、せっかくあの幼なじみから立ち直
れてたのに……俺、知らなくて…

…」

「そんなんじゃない……そんなんじゃない！」

俺が好きなのは、ずっと朋美だけだ！

最後の言葉は口から出せなかった。

康介は俺が新たに恋愛対象を見つけて、それを支えに完全に立ち
直ったと思ったのだろう。

康介は俺の様子が明らかにおかしいので、困惑しきっている。

「悪い……今日は一人で帰る……」

そう言い残して俺は駅に向かって走り出した。なんでこんな風にな
った。そんなの決まってる。俺が

康介に、朋美のことをすっかり話しておけば良かったんだ。中学の
ときに言えなかったのなら、高校に

なっってからでも言えば良かった。そうすれば、康介が朋美を譲って
くれるとかそういう考えでは決して

ないけど、もつと他にいい道があったはずだ。そうすれば、少なく
ても今みたいに俺が取り乱して、康

介を困らせることはなかったはずだ。

すっかり夏も終わり、涼しくなった風が全身に感じられる。普段
は気持ちいいはずのそんな風も、今
は空しいだけだった。

第4話　―誤解―

また一つ授業が終る。今のが四時間目だから、もう昼休みだ。

「キリーツ。キヨツケー。レー」

どつと賑やかになる。弁当を食べるために隣の席に移動したり、机を動かしたりする奴も居る。俺

もいつもは康介と食べるために席を移動するのだが、あの日以来気まずくて康介とあまりしゃべって

いない。もう4日目くらいだろうか。

あの日の翌日、康介が話しかけてくれたが、俺は素っ気ない態度を取ってしまった。康介は俺のことをそつとおこうと思ってくれたらしい。今の俺にとって、その判断は助かった。俺のせいでき

くしくしてるのにまた康介に気を使わせてしまっている。

本格敵にややこしくなってしまった。

相変わらず朋美とはしゃべれないし、康介にも気を使わせてしま

う。
本当に俺って情けない。今、教室の中には朋美も康介もいない。別にいてもどうにか出来る自信はないが。

昼休みは全部で45分ある。今は弁当を食べる気にはなれなかったので、校舎の中を適当に散歩してみることにする。

一年のときはよくこうやって昼休みに散歩した。中学の頃から俺はひとりを好むタイプなの、康介以外とは弁当を食べたりしなかったからだ。友達がいらないわけではなかったが、一緒にいる価値があると思える奴がいなかった。だから、康介が部活の集まりとかでない時は一人でぶらぶらやってた

のだ。

まず教室を出て左に行くと国語科の職員室があつて、その奥には何かの倉庫があるだけで何も面白くない。だからとりあえず右に曲がる、右にはD組とE組の教室があつて、その向こうに渡り廊下と階段がある。階段を下りてまっすぐいくと昇降口に続く廊下で、そこに売店が出ているので、そこに行つてみるのも良い。

階段を下りずに渡り廊下の方に行くという選択肢もあつた。渡り廊下は二本あつて、そのうちの一本が俺のお気に入りだった。その渡り廊下は、旧校舎と新校舎を結ぶ渡り廊下だが、旧校舎は耐震強度が足りないために近年しようにできない。なのでその渡り廊下に来ることはほとんどなく、しかも途中で直角に曲がっているので、奥に行けば一人になれる良い場所だった。

「久々に行つてみようか……」

なんだかあの場所を思い出すと、突然一人になりたくなった。2年になつてからはあまりいなくなっていたから久しぶりだ。行つて特に何かをするわけではないが、あそこに行けば落ち着けるような気がした。行き先を決定し、すでにボーっとし始めた頭で考えてみる。

何で俺、朋美のことこんなに好きでいられるんだろう……小学校5年生くらいから高校2年生までずっと片思いだ……

自分で言つても馬鹿らしいと思つてしまふ。

そんなことを考えていると渡り廊下の奥はもうすぐそこだった。

「久々に一人になりますか……」

しかし、渡り廊下は俺を一人にはしてくれなかった。

そこには、康介がいた。

「しゅ、旬太！」

とびつきり驚いた顔をしている。
それもそのはずだ。

「旬ちゃん……」

俺の事を『旬ちゃん』なんて呼ぶのは一人しかいない。

他でもない。朋美がいたのだ。

朋美が少し焦ったように、そして何か言いたそうに、口をモゴモゴしているが声は出てこない。

康介が焦ってフオローに入ってくる。

「旬太！ これは、違うんだ！ お前が思ってるような事では絶対ない！」

俺はもうそんな事はどうでも良かった。

どうでも良くなった。

俺は何も言わなかった。

黙って、その場から走り去る。

後ろから康介の呼び声があるが、その声を振り払うように走り続けた。

あの日から。渡り廊下ではちあわせたあの日から。

俺は康介を無視した。そんなのは理不尽だって事くらい分かった。康介だって好きな人はできるし、告白だってする。

そんなことは分かっているのに。べつに康介が許せないとかそういうのじゃないのに。なぜか俺は康介を無視してしまった。

「なんで俺はこんなに馬鹿なんだ……もう何にもわかんねえよ……」
俺のせいだ。全部俺がややこしくしてる。

俺は一人で登校しながらそんな事をつぶやいた。

「今日もまた、退屈な一日が始まります……」

最近の退屈を通り越して憂鬱だった。

もう学校に行っても康介とはつるめない。康介と関われない学校生活は本当に面白くないものだった。

た。改めて康介が俺にとって大切な人間だと認識する。

でも、前みたいに接する事が出来ない。

なんでこんな風になってしまったんだ。

俺が考えるのはそんな事ばかりだった。

そして学校に到着する。

教室に入るとすぐ朋美が目に入った。渡り廊下であった日から毎

朝、朋美は何か言いたそうに俺の

方を見てきたが、お互い声をかける事はしなかった。

そして、康介はというと毎朝遅刻ぎりぎりに来た。前からそうだったが。

朝のチャイムが鳴ると、豊崎先生が教室に入ってきて、ホームルームを始める。またいつもの繰り返しだ。

「ごちゃごちゃ考えてると、時間というものはあっという間に過ぎていく。」

今日もまた一日が終る。

そのまま、何日か過ぎていった。

康介とも誰ともしやべらず。

そして、ある日の放課後。

康介に突然呼ばれた。

「おまえ、ちょっとついて来い」

かなりの剣幕だった。

しびれを切らしたらしい。俺はとくに何も考える事もなく、ついて行った。

行き先は、あの日の渡り廊下だった。

「おまえ、いい加減にしろよ」

康介の第一声はそれだった。俺はもう何とでもなれという様な感じで受け答えた。

「何をだよ？ 俺がお前を避けてる事か？」

それを言った瞬間、康介の表情がさらに厳しいくなった……様に見えたが、はつきりとは見えなかった。

康介に殴られたのだ。左頬を。思い切り。

「ツツ……！」

俺はその場に倒れ込んだ。

「いつまでそうやって逃げてんだって言っただよ！」

「何の事だ！？ おまえ、意味わかんねえよ！」

「朋美ちゃんの事だよ！ 朋美ちゃんのこと、いろいろ聴いたんだよ！」

「なんだ？ 朋美が好きで、朋美を嗅ぎ回ってたってか？ 馬鹿か！」

「朋美ちゃんとおまえの関係だよ！」

「……！」

朋美と俺の関係……

幼なじみってこと知ったのか？

なんで？ 本人から聞いたのか？

「おまえと朋美ちゃん、幼なじみだそうじゃんか」

「なんでそのこと……」

「朋美ちゃんと同じ小学校出身の奴にきいたんだよ！ 俺だっておまえの様子が明らかに変だって気

づいたよ。だから……もしかして……まさか本当にそうだと夢にも思ってたけど

よ。もしおまえがあそこまで変になっちまう理由があるとしたら、朋美ちゃんがおまえの片思いの

相手かもって思ったんだよ。それで、聞いて回ったんだよ。」

「なんでそこまで……なんでそこまでわかったんだよ？ なんでそ

んな、そんな途方もない推測たっ

たんだよ!？」

「おまえの変わり方が異常だったからだよ!」

「……」

「おまえ……こんなこというの気持ち悪いけどよ……俺の事、心から友達だと思ってくれてただろ？」

周りの奴らみたいな中途半端な友達関係じゃなかっただろ？

だから……そんな俺にさえあんな

態度とるようになってしまったことは……俺よりもっと大事な物がどうにかなくなっちゃまいそうだった

ってことだろ？」

「……」

なにも言えなかった。

こいつは……康介は……

「おまえにとつて、一番大事なもん。そこまで考え至ったら後は簡単だったよ。最初は信じられなかつたけど。確かめてはつきりした。」

「康介……俺……」

「別に俺に黙ってた事どうこう言おうってんじゃない! 俺が……

おまえに……朋美ちゃんが好きだ

って言ったとき……なんで黙ってたんだよ?俺に打ち明けてくれなかつたんだよ?」

「だって……そんなこと言ったら……」

「フェアじゃないからってか? 打ち明けたら俺が朋美ちゃんのこと遠慮すると思ったからか? そ

りゃあそうだろ。友達が小学校の頃から恋してる相手と、その友達を差し置いて恋人になろうなんて気が引けるよ。」

「じゃあ……じゃあ、どうしろってんだよ!？」

「なんも気にしないで、打ち明けてほしかった。」

親友ってそんなもんだろ？ 康介はそれだけきっぱり言って、急に表情が柔らかくなった。

「康介……」

康介の方が、完全に俺の上を行っていた。俺はどうしたらいいかわからなくなつて、途方にくれて

ることを、こいつはわかつてくれていた。

「やっぱ俺……康介がいないとダメだわ……」

そういつた俺をみて、康介はふふんつと鼻で笑った。

「俺だって、旬太がいないとダメだよ」

「へへっ……気持ちわりっ……ホモかよ……」

不覚にも、泣いてしまった。康介は……こいつは……

「さあて、これで仲直りだな！ 旬太よ！」

「……？」

「告りに行くぞっ！」

「はっ？」

俺は状況がつかめなくなった。康介とこうして仲直り出来て、正直嬉しかった。しかし次の瞬間に

は……

「はあああああああ！？」

俺は床に倒れた状態のまま、康介に両腕をつかまれ引きずられていった。

今は正直に嬉しい。康介がやっぱり本物の親友だって確認できた。

しかし……このあと……どうなんだろう……？

第5話　―告白―

「ちょっと待てよ！　待てって！」

俺をつかむ康介の右腕を無理矢理振りほどく。

「いきなり告白するとか、無理に決まってるじゃなか！」

「何をいまさら！　いままで散々思い悩んできたではないか！　今こそ、ケジメをつける時だ！」

康介はまた腕を引つ張っていく。強制的過ぎだ……

「なんで今なんだよ？　別に今じゃなくなたって……」

突然、康介が振り向いたのでしゃべるのをやめてしまった。

「な、なんだよ……」

「おまえ、今じゃなくて良いって言ったな」

「あ、ああ」

「じゃあ、いつやるんだよ？」

「え……？」

「じゃあ、いつ告白するんだって聞いてんの！」

康介の口調は強かった。ちょっと言い返せない……

「わからないんだろ？　いつ告ればいいか。なら今だよ！　今！」

完全に反抗できなくなった。

告白しなければならぬ……

今から……

頭の中が真っ白になった。

「な、なな、なんて、い、言え、いいか、なあ？」

「そんなの自分で考えろ！」

言いながらも康介はぐいぐい俺を引つ張っていく。

俺はもう何の抵抗もできず、素直に従うしかなかった。

「着いたぞ」

到着にそう時間はかからなかった。

行き先は教室だった。

「なんで教室なんかに？」

「中に朋美ちゃん待たせてる。早く行って来い！」

康介が無造作におれの背中を叩いた。何度も何度も。

康介は表情を見られまいと下を向いているが、俺はその表情を見てしまった。

泣きそうな顔だった……

「康介……おまえ……」

「ほら！ 早く行けよ！ 一発かまして来い！」

康介は、取りはからってくれたのだ。俺に告白させるために、この状況を造ってくれたのだ。

康介も朋美が好きなのに……その想いを飲み込んで……

俺は申し訳なくなつた。でも、ここまでしてくれた康介に申し訳なさそうな態度を取る事は、もつ

と申し訳ない。

康介……おまえは……

「康介、おまえが俺の親友で本当に良かった」

「……くつ。早く行けよ……」

康介本当にありがとう。

俺は教室の前に立つ。

これから、朋美に告白するのだ。

だが、俺は緊張していなかった。逆に晴れやかな気分だった。

これで、今までの想いを伝える事が出来る。六年間溜め込んできた想いを、伝える事が出来る。

教室の扉を開ける。

「旬ちゃん……」

朋美は俺の席のそばに立っていた。

今日ものびた長い髪を、両肩のあたりで二つの束にしていた。いつも同じ格好なのに、いつもより奇麗に見えた。

「朋美……」

俺は朋美に歩み寄る。

朋美が俺の顔を見上げてくる。とろんとした、瞳を覗き込むと吸い込まれてしまいそうだった。

そんな朋美の目を見ていると、朋美への想いがあふれてくる。ずっと、好きだった。

ほんの幼い頃から一緒だった。小学校に入っても一緒に遊んだ。高学年に上がっても朋美が気になって仕方なかった。中学で別れてしまう事を知り、本当に悲しかった。中学に入っても朋美を想い続けた。

そして、高校で再会して本当に嬉しかった。俺の中には朋美しかいない。ずっと前から。

そう……ずっと……ずっと……俺は、

「ずっと俺は、朋美の事が好きだった」

はつきり言えた。もじもじしないで、自分の中に溢れる想いを素直に表現出来た。

朋美にはちゃんと伝わっただろう。

俺はこの短い使い古されたフレーズに、俺の全てをのせたのだ。

朋美は未だに何も言わない。黙って下を向いている。

俺はその表情を伺う事は出来ない。

教室の窓からはちょうど夕日が見えた。夏が終わり、日が短くなり始めたこの時期の太陽は、ちょうど地平線に差し掛かっている。

その夕日が、朋美の瞳から落ちた雫を、宝石のように輝かせた……

俺が朋美と付き合う事になった日から数日後。

康介が面白い計画を提案してきた。

『LTUS計画』

いかにも中2臭いネーミングだが、内容は面白い物だった。

『星空の下で語り合おう』

それだけがテーマだ。

Let's Talk Under the Stars 計画
ということだ。

康介らしいネーミングだが、内容はなかなか粋だ。

俺たちの地元の駅から電車で30分くらいの駅のそばに海がある。
その砂浜で星を見ようと言っわ

けだ。なんだか発案者が明らかに邪魔なシュチュエーションだが……
しかし、三人とも賛成だったのですぐに準備が始められ、発案から一週間で実行された。

9月下旬の海ははつきり言って寒かったが、俺たちは気にせず遊び回った。

到着したのが夕方だったので既に日は沈み始め、あたりは暗くなってきた。

「あつ！ 星出てきたよ！」

「本当だ！」

「うおー！本格的に計画実行だ！」

そんな些細なことで盛り上がる程、俺たちのテンションは最高潮だった。

そして、刻一刻と時間は過ぎた。

気がついたら辺り一面、星の海だった。

「すごいね……綺麗……」

「ここで流れ星でも流れたら百点なのにな」

「そんな都合良く行くかよ」

康介がもつとロマンチックな状況を求めているのは、ちょっと笑えた。

俺たちは康介が持つてきたブルーシートの上に寝転がってかなり長い時間しゃべっていた。お互いを馬鹿にしたり。康介の恥ずかしい話をして朋美が笑い転げたり。本当に楽しい時間だった。

星空はあまりに綺麗だった。黒いカーテンに宝石を散りばめたような空を見ていた。

「朋美ちゃん寝ちゃったね……」

「さつきからはしゃいでたからな」

そこからは俺と康介でしゃべった。

「康介。今回のことは本当ありがとな」

「何言つてんだよ、改まって。こんな計画何回でもたててやるよ」

「いや、計画じゃなくて……ほら……」

「告白の事か？ いいんだよ別に」

「だっておまえも朋美の事……」

「俺が決めた事だ。おまえは気にする事ない。おまえに朋美ちゃんは似合わないと思ったら、俺が全力アプ

ローチしてたぜ」

「でもおまえ、あの時泣いてたよな？」

「う、うるせえなあ！ ちょっとばかし朋美ちゃんから暴露されてたんだよ……」

「じゃあ、やつぱ朋美も俺の事……」

「小4の時からだってよ。おまえより長い」

「そうかあ。それは考えなかった……」

そのとき俺はなんと康介に礼を言ったか覚えていない。

それでも俺の感謝の気持ちは伝えきれなかったかもしれない。

「康介」

「ん？」

「やつぱおまえは、俺の親友だ。ずっと一緒にいよう」

「人にキューピットやらせといて、それでメカよ。まったく……当たり前前だろ？　ずっと一緒だ」

そのあと台詞がホモ臭いとふたりでゲラゲラ笑った。

ずっと長い事笑ってて疲れてしまった。そして横になる。

いろんな色の星々が輝いていて本当に美しい星空だった。

またこんな風に見れたらな……

俺は心からそう思った。

第5話　―告白―（後書き）

最後までよんでいたき、ありがとうございました。
初めて書いた小説なので自信がありません。
アドバイスなど頂けると、とても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4587o/>

満天の星空の下で

2010年10月23日00時26分発行